



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
http://www.kokubunken.or.jp/
E-mail: info@kokubunken.or.jp
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

日本の国柄と『論語』の章句

―「令和」の御代を迎へて―

岩越豊雄

万世一系の皇位

皇太子殿下が皇位を踐まれて、新帝陛下の元号「令和」が施行された。新元号は『萬葉集』巻五の「梅花の歌三十二首并せて序」の「初春の令月にして、気淑く風和ぎ」からの引用といふことで、長い元号の歴史の中で、初めて漢籍に拠らずに、日本の古典から選ばれた。

産経新聞の社説には、「漢籍は今回、元号の典拠とならなかったが中国のみならず東洋、ひいては世界の文化財だ。国書と並ぶ日本文化の礎であり、どちらがどうという関係にはない」とあった。その通りだと思ふし、かねてから漢籍（とくに『論語』）に関心を抱いてきた私だったが、やはり日本人の血が流れてゐるからだらうか、『萬葉集』が直接の典拠と知って嬉しく思った。

言ふまでもなく天皇は天孫降臨に連なる「万世一系の皇位」を継がれる方であり、歴代の天皇は自らを厳しく律して徳をみがいてこられた。『論語』には、国を治めるには、徳が元であるといふことを説いた章句が多くある。

古来、政治は「まつりごと」（祭事）といひ、国の安定と民の幸せを願つて、神々に祈り占ふ営みだったと言はれる。その根本は為政者の「徳」にあった。

為政篇一には左のやうにある。子曰く、政を為すに徳を以てすれば、譬へば北辰の其の所に居て、衆星の之に共ふが如し。

先生がおっしゃった。「徳ある人が世を治めれば、北極星（北辰）がその中心に居て、星々がその周りをめぐるやうに、人々が慕ひ寄り、円く治まる事が出来る。」

まさに天皇を中心に続いてきた日本の国柄を示すやうな一節である。このほど福沢諭吉に代つて「新一

万円札」の肖像に決つた渋沢栄一は、著書『論語と算盤』の中で、「もし孔子が日本に来て万世一系の我が国体を見聞したならば、どれ位賛嘆したかしなければならない」と述べてゐる。

徳は得なり

それでは「徳」とは何か。白川静博士の『字統』には「徳は得なり」とある。「徳ある人」とは人に「得を与へられる人」と言へばよく分る。得とは物質的な「得」だけではなく、精神的な「得」でもある。里仁篇二十五にも、「子曰く、徳は孤ならず、必ず隣有り」とあるが、徳ある人は、孤立しない必ず共鳴者を得るといふことである。

周知のやうに、天皇の重要なお務めとして、国中が穏やかに、そして国民が榮えるやうに、皇室の御祖先や八百万の神々に祈られる宮中祭祀がある。まさに「政」は「祭事」である。

また、歴代の天皇は和歌をお詠みになつてをられる。和歌は古来の「敷島の道」と言はれ、「日本古来の道」「日本人の道」「和歌の道」を意味するが、それは言葉を正しく表現する中で、「まごころを磨く道」といふことだと思ふ。さうした「まごころを磨く道」（無私の徳）を修めようとする天皇を「国の中心」に仰いできたことが、国の纏りと安定に

繋がつてきたのではないかと思ふ。

まごころを詠んだ詩歌

『論語』為政篇二には、詩について述べた次のやうな一節がある。

子曰く、詩三百、一言以つて之を蔽ふ、曰く、思ひ邪無し。

先生がおっしゃった。『詩経』に収められた三百の詩は、一言で言へば、どれも有りのままの心で、飾らうとする思ひが無い、さういふ詩で満ちてゐる。

「詩」とは、中国最古の詩集『詩経』のことで、殷の世から春秋時代までの詩、約三百篇を集めたものである。日本でいへば、『萬葉集』がそれに相当する。「邪」（よこしま）とは、自分を偽つて良く見せようとして飾らうとする心のことだらう。

明治天皇の御製にかざらむと思はざりせばなかなかにうるはしからむ人のころはとある。また、

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけばわすれざりけりといふお歌もある。

まごころからの表現、つまり自分を飾らうしない「まごころの心」を詠んだ詩歌は読む者の心打つといふことだと押し申し上げてゐる。

御代替りに際会して、改めてわが「日本の国柄」を思はしめられてゐる。（寺子屋石塾主宰）